

今を生きる社会人たちは、キャリアという大きな海を
どんな船に乗って航海しているのだろう。
港に立ち寄るさまざまな社会人たちの船=仕事から、
これからの仕事・働き方へのヒントを探ります。



人生がちょっと楽しくなる 「好き!」のパワー



モデル・文筆家 おたにみゆ
小谷実由

1991年東京都生まれ。14歳からモデル活動を始める。自分の好きなものを発信することが誰かの日々の小さなきっかけになることを願いながら、エッセイの執筆、ブランドとのコラボレーションなどにも取り組む。猫と純喫茶が好き。通称・おみゆ。

← J-WAVE original Podcast「おみゆの好き蒐集倶楽部」のナビゲーター。(各種プラットフォームにて、毎週金曜配信中)

取材・文／今井夕華 撮影／竹内弘真

小谷実由さんのお仕事について

① 一番のやりがい

誰かの役に立っていると実感できること。誰かの「好き」を見つけるきっかけをつくれること。

② ターニングポイント

23歳のころ、自分の「内面」や「好きなもの」を発信するスタイルにシフトしたとき。

③ こんな人におすすめ

モデルの仕事はあくまでも洋服が主役なので、お洋服が大好きな人。

いろんな服を着てみたい
その願望からモデルの道へ

「小学校6年生でファッション雑誌を読むようになり、お洋服に目覚めました。高価だからたくさんは買ってもらえないけれど、どうやったら素敵な服をいっぱい着られるんだろう？それで思いついたのが、自分自身がモデルになることだったんですね」

そう語るのは、モデルで文筆家の小谷さん。幼少期から高身長で、中学2年生のときに芸能事務所に所属した。

「部活には入らず、生徒会で副会長を担当していました。勉強も運動も苦手だったのですが、高校は英語の専門コースへ進学。美術や音楽など、自分の好きな授業には熱中していましたね」

事務所に所属したはいものの、仕事のオフアはなかなか来なかった。



小谷さんの著書である『集めずにはいられない』（ループ舎）と、仕事用のノート。ボールペンは0.38mmを愛用。

「オーディション会場には華やかな子がたくさんいます。高校を卒業するときにモデルも辞めて、ライブハウスで働こうかなどと考えていました」

あの仕事がなかったら、ここまで続けられなかった

転機となったのは、高校3年生のときに舞い込んだ、CMへの出演だった。

「バンドを組んでいる高校生の役で、実際にライブもするというもの。オーディションではニルヴァーナのベースラインを淡々と披露しました。『歌も歌える？』と聞かれたのですが、思春期ということもあって『いや、大丈夫です。ベースなんて』みたいな対応をして（笑）。でもそれが印象的だったようで、合格をいただきました」

メンバーとスタジオに入り、たくさん練習



櫛が大好きで、世界各国から買い集めた500本以上をコレクションしている。カラフルでキッチン可愛さが魅力。

習をして撮影やライブに臨んだ。

「生まれて初めてきちんとした役をもらって、大人数が携わる作品に参加できたことが心から楽しくて。こんなに何かに真剣に打ち込んだことはなかったですし、大きな成功体験になりました。それで、もう少しこの世界でがんばってみようかなって思えたんですね」

「好き」を見つけるヒントに
役割を全うするプロ意識

「私は、本や映画、純喫茶、櫛など、好きなものがたくさんあるタイプで、集めることも自然なことでした。だけど『自分の好きがわからない』というファンの方の声に、そういう人もいるのかとハツとして。好きなものが増えても生きていけるけど、あったら人生がちょっと楽しくなるし、バ



コレクション100本目の記念で購入した櫛。持ち手部分に金色で「100」と刻印してもらった、お気に入りの逸品。

ワーをもらえる。そういう『好き』について、もっと発信していきたいなと感じたんです。それで、PODOLの企画書を自ら書いて持ち込み、番組化してもらいました。毎回さまざまなゲストを迎え、その人と『好き』との関係性をじっくり紐解く番組です。現在、配信開始してから3年半。私自身にとっても本当に大切な場所なので、これからもずっと守っていきたいですね」

活動は多岐にわたるが、大切にしているのは「自分の役割」を全うすること。

「モデルの仕事はお洋服がメイン。お洋服が最も美しく見えるポーズを意識しています。文章を書くときは自分の温度感になるべく近い言葉を選び、番組ではゲストの魅力を引き出す役に徹する。自分がその場で求められている役割を常に考えて、丸ごと楽しんでいます」